

# 張我軍と大正生命主義

——時代の転換期の翻訳は何を伝えたか——

工 藤 貴 正

## はじめに

張我軍は「台湾の文学は、中国文学の一支流である。本流において何らかの影響、変遷があれば、支流もそれに伴い自然に影響、変遷する。これは必然の道理である」（「請合力拆下這座敗草穢中的破旧殿堂」『台湾民報』3巻1号、1925.1）と語ったように、台湾新文学を大陸文学の中の一環と見なして、「文学革命」の紹介とそこから生まれた新文学を台湾に招き寄せた。すなわち、台湾新文学運動は、欧州大戦後の「民族自決主義」の影響を受け、日本化（同化）が進展する中で失われていく漢民族としての文化アイデンティティを保ち、祖国との民族アイデンティティの連帯を願う台湾知識人の民族意識の表れとしての中国五四期に高潮した新文化運動の流れを汲む中国白話文運動の系譜に位置づけられている<sup>1)</sup>、と評されている。

筆者は、台湾近現代史や台湾近現代文学史においては、台湾が日本殖民地下にあった現実と照らせば、中国大陸で文化伝統批判と儒教批判の手段として白話文（口語文）を使って行うことを企図した「新文化運動」と、抗日、反帝国主義を標榜して行った「五四運動」とは切り離して論ずべきだと考えている。

「中国新文化運動」は、陳独秀の創刊した『新青年』（『青年雜誌』1915年）に寄稿した胡適、陳独秀、魯迅、周作人、錢玄同、蔡元培、李大釗などの西洋的思想の影響を受けた知識人が「反伝統・反儒教・反文言」などを主張した文化伝統に対する革新運動であり、言文一致運動である。一方、「五四運動」は、1919年パリ講和会議のベルサイユ条約の結果に不満を抱き、5月4日に北京で発生し、全国に広がった抗日、反帝国主義を掲げる学生運動であり、大衆運動であったが、後に、中国共産党の革命史観により、「五四運動」はナショナリズムが真に大衆化した民族運動として捉えられるこ

となる。そこで、中国大陸においては、「反伝統・反儒教」などの旧体制批判と「国家主義」「民族主義」を鼓舞した二つの主張が連動しているので「五四新文化運動」とも称された。

そもそも、抗日、反帝国主義を掲げる1919年に発生した「五四」が、1919年10月に結成された中国国民党や、1921年7月に誕生した中国共産党にあっては「中国現代史」の幕開けとして重要な意味があって当然である。しかし、日本植民地下の1920年代当時の台湾においては、抗日、反帝国主義運動の表面的な影響は考え難く、更に「五四」の影響による「民族アイデンティティの連帯を願う台湾知識人の民族意識」という観念として台湾知識人に滲透するとしたら、それは、1949年以降、中国大陸における国共内戦に敗れて渡台し、台湾の新たな支配者として君臨した中国国民党の成員としての理論においてであろうと、筆者は考える。

しかし、時系列として1920年代に渡中していた一部の台湾人の場合には、1915年から展開する「中国新文化運動」が1919年の「五四運動」で高潮期に達したことを認識し、「新文化」と「五四」とが連動していたと感じるはごく当然の事実であろうことも、筆者は理解する。例えば、1923年10月に結成した「上海台湾青年会」に参加した張我軍や蔡孝乾や、1926年6月から活動を開始する「広東台湾革命青年団」に参加した張深切や張月澄などの人物はそうである。

本稿では、「五四精神」「五四文芸」「五四新文化運動」という頭に「五四」を冠する概念をその後の台湾に導入するきっかけを作った張我軍を採り上げる。張我軍は半年余の北京体験後、1年半『台湾民報』の編集担当を務めるが、この時期の彼の台湾に対する意識と、『台湾民報』に翻訳掲載した10篇の日本語作品を通して、彼が「民族問題」「民族意識」をどのように捉えていたかについて考察を加えたい。

## I 張我軍の「台湾は中国の一部で、台湾人は中国人だ」とする「民族意識」—「個人」の「生命力」重視から「民族」の「生命力」重視へ転換の時代

張我軍(1902-1955)、原名清榮は、台北県枋橋(現在、新北市板橋区)に生まれ、公学校卒業後、新高銀行に給仕、雇員として務め、1921年には新設の厦門支店の勤務となる。同年から漢文を学んだ厦門同文書院で、

清の遺老秀才から「我軍」の名を授かり張我軍と改名する。その後、船で上海に渡り、1923年12月から1924年3月までの上海時期には上海台湾青年会に参加、さらに1924年3月から10月末までのおよそ8ヶ月を北京師範大学の教員・学生が経営する補習班で北京大学受験に備えた第1次北京生活を体験する。しかし、北京大学は受験せず、1924年10月下旬から1926年6月まで台湾に一時帰郷する。その間、1925年1月から1926年6月まで『台湾民報』の編集を担当し、同6月に編集担当を辞職し、妻羅文淑（心郷）と共に北京に渡り、戦争終結により1946年の年明けに台湾に帰郷のため北京を離れるまでの20年余の北京生活を体験している。これを第2次北京体験という<sup>2)</sup>。張我軍の第2次北京体験については山口守の研究に詳しい<sup>3)</sup>。

張我軍は第2次北京体験が始まってすぐの1926年6月11日（『魯迅日記』）に、『台湾民報』4冊を携えて魯迅に会っている。4冊の中には、1926年5月から7月にかけて計10回に亘って連載された張我軍訳・山川均『弱少民族的悲哀』の一部が含まれていた。張我軍と魯迅との対談は、魯迅が北京脱出を控え、客人が多く訪れたり「コレラの予防注射」を打ったりと、かなり準備に忙しい時期に行われている。そして、『魯迅日記』で次に「張我軍」の名前が出てくるのは、魯迅上海在住の1929年6月1日であるが、この時張我軍は魯迅に会えていない。

魯迅は1926年8月26日に北京を脱出後、上海、厦門、広州を経て再び上海に戻って来たのは1927年10月3日ある。魯迅は広州で初めて出会った張秀哲（原名、月澄）という台湾の青年に頼まれて、彼の翻訳した浅利順次郎著・張月澄訳『国際労働問題』（広州国際社会問題研究社出版、1927）という書籍のために、1927年4月11日付で、『『国際労働問題』小引』と題した「序文」を寄せている。その中で、1926年6月11日に会った張我軍のことを次のように語っている。

まだ覚えているが、去年の夏北京に住んでいた頃、張我権君に会って、彼がこういう意味のことを話すのを聞いた。「中国人はみな台湾のことを忘れてしまったのか、誰もほとんど採り上げない」と。彼は台湾の青年であった。

私はその時、私はキズに痛みを感じたように、いささか辛かった。だが、口ではこう言った。「いや、そうでもない。ただ本国があまりにもめっちゃめっちゃで、内憂外患がとても多く、自分のことで手一杯なので、台湾のことはしば

らくはほっておくしかないんです。……」と。

だが、苦しみのさなかにある台湾の青年は、中国のことをしばらくほっておいたりはしない。彼らはつねに中国革命の成功を希望し、中国の改革に賛助し、たとえ自分がまだ学生であったとしても、尽力して、中国の現在と将来に役立ちたいといつも考えているのである。(魯迅「写在『労働問題』之前」『而已集』)

「張我権」は魯迅の誤記であるが、張我軍はこの時北京中国大学国学系の学生で、1927年10月に北京師範大学国文系に編入学し、同校を1929年6月に卒業している。魯迅は、張我軍が自分は中国人であり、台湾は中国であり、同じ中国人として「中国革命」を目指し、「中国の改革」に賛同協力しているのに、周りの中国人は台湾に関心を示してくれなかったと、彼の当時の心境をスケッチしている。

張我軍が、第1次北京体験(1924.3-1924.10)と第2次北京体験(1926.6-1946.1)の間で、『台湾民報』編集者を担当した時期(1925.1-1926.6)に、大正・昭和初期の日本からの翻訳素材を取捨選択し、中国語で翻訳或いは紹介して『台湾民報』に掲載した作品は以下の10篇である<sup>4)</sup>。

1. 時論／大阪朝日3月1日「台湾瑣言」、張我軍譯〈農民問題二件〉《台湾民報》第3巻第9号, 1925.3.21, 11頁
2. 翻譯／宮島氏、相田氏合著、張我軍譯〈宗教的革命家甘地〉《台湾民報》第3巻第18号—第73号まで全13回連載, 1925.6.21-1925.10.4
3. 翻譯／安部磯雄著、張我軍譯〈貞操、是「全靈的」之愛〉《台湾民報》第60号, 1925.7.12, 12頁
4. 翻譯／安部磯雄著、植民一郎譯〈大婚二十五御下賜舎和恩殖民地的教化事業〉《台湾民報》62号, 1925.7.26, 8-9頁
5. 翻譯／米田實著、張我軍譯〈中国的国権恢復問題〉《台湾民報》第66号—第71号まで全5回連載, 1925.8.23-1925.9.20(原典『改造』9月号)
6. 翻譯／柴田廉著、張我軍譯〈論台湾民報的使命〉《台湾民報》第67号, 1925.8.26, 4-5頁
7. 編譯／張我軍〈至上最高道德—恋愛〉《台湾民報》第75号, 1925.10.18, 14-16頁(厨川白村著《近代の恋愛観》、張我軍編譯)
8. 論文／張我軍譯〈文藝上的諸主義〉《台湾民報》第77号—第89号まで全

- 6 回連載, 1925.11.1-1926.1.24 (厨川白村著《近代文学十講》、張我軍編譯)
9. 翻譯戯曲／武者小路実篤著、張我軍譯〈愛慾(共四幕)〉《台湾民報》第94号-第95号まで全2回連載未完, 1926.2.28-1926.3.7 (〈愛慾〉引言、第一幕)
10. 翻譯／山川均著、張我軍譯〈弱<sup>マ</sup>少民族的悲哀—in「一視同仁」,「内地延長主義」,「同化融合政策」下的台湾〉《台湾民報》第105卷-第115号まで全10回連載, 1926.5.16-1926.7.25

上記の10種類の翻訳は(1)(4)(5)(6)の時事・論評と(8)の厨川白村理解の文芸流派の紹介とを除けば、残りは「生命主義」に関連する作品である。

(3)(7)(9)は、過去に抑圧されて失われた女性の権利を回復しようとする儒教批判やフェミニズム論の立場から「個人の生命」を「恋愛至上主義」の観点から新たに構築する「生命主義」の系譜であり、(2)(10)は、抑圧された「民族の生命」から生じる「生命主義」の系譜である。

「中国新文学」運動期の『新青年』には、個人の自覚や意識改革のより社会改造を目指した周作人訳・与謝野晶子「貞操論」や胡適「貞操問題」が掲載されるが、張我軍は、(3)でこの与謝野の「貞操」観に対峙する安部磯雄の「恋愛」観を紹介し、(7)で厨川白村の『近代の恋愛観』を通して「恋愛」によって「浄化」され、「最高の道徳」となった「自己犠牲」を発見していることを紹介し、(9)で身障者差別と不倫を描きながらも「大正生命主義」の典型的な作品である武者小路実篤戯曲『愛慾』を翻訳し、「個人」の「生命力」の解放を伝えている。なお、張我軍訳は2回だけの連載で未完に終わったが、中国では武者小路の『愛慾』は全裸の女性を表紙面にして、章克標の全訳版(127頁)で上海金屋書店から1928年4月に出版されている。

日露戦争から関東大震災に至る1905年から1923年の間、大正期の知識青年たちは、「自己表現」「自我の解放」を標榜すると同時に、西欧の哲学や芸術を中心にこれを広く教養として身につけることで、人格を高めることを目標としていたが、この潮流を「大正教養主義」と言う。

鈴木貞美は、大正期の教養主義(culturism)のなかでも、「生命」の語が氾濫し、「生命」がスーパー・コンセプトになり、競争する個を超え、普

遍的概念としての「生命」を重視する現象を、田辺元が『文化の概念』（『改造』大正11年3月号）の中で「生命主義」という言葉で解説した概念と共通することも後押しして、「大正生命主義」と名づけている<sup>5)</sup>。

鈴木氏の「大正生命主義」の理論を援用し要点を纏めると次のようになるろう。

大正期の「生命主義 (vitalism)」とは、無機物質に還元出来ない「生氣」すなわち「生命力」(vitality)を生命現象の根本とし、機械論、進化論、合理主義、功利主義により出現した自然征服観や物質文明の進展を「文化」とする考え方に対峙する思想傾向であり、心身活動を阻害するものから解放する「個人」の創造的な「生命力」により、文化を創造し、社会を改造するための思想原理である。ただ注意を要するのは、「生命主義」が「民族」の「生命力」を基本概念とすれば、強力なナショナリズムともなり得た。その結果、「大正生命主義」は関東大震災後に支配体制と反体制運動の両方から切断され、震災後に国民精神統合の機運が高まるに連れ、欧米列強のアジア侵略に対抗するため、アジア諸民族が日本を盟主に団結すべきとする大アジア主義 (Pan-Asianism) のうちに吸収されてしまう<sup>6)</sup>。(下線は筆者、以下同じ。)

魯迅も周作人を間違いなく国際主義者または世界主義者であったことは疑いない。周作人は白樺派の武者小路実篤の主宰する「新しき村」運動に共感しており、彼の「新しき村訪問記」(1919.7.30)には、1919年7月2日に北京を出発し、宮崎県日向の「新しき村」運動に参加したことが詳細に語られ、「新しき村」の村外会員となり、北京八道湾の自宅に北京支部を設けている。また、1920年4月7日の『周作人日記』には、「毛澤東君来訪」とあり、若き毛沢東(1893-1976)がこの「新しき村」の状況を尋ねに周作人を訪問したことが示されている<sup>7)</sup>。さらには、魯迅・周作人兄弟はともにエスペラント語を学んでおり、1921年5月に「帝国ノ安寧秩序ヲ害スル虞アリ」と日本を追放された迄盲目の詩人ワシリー・エロシェンコ(1890-1952)を北京大学エスペラント語講師として招くのに尽力し、1922年2月から23年4月まで八道湾の自宅に逗留させている。この時期に魯迅が訳したエロシェンコ作品二篇は、張我軍によって、1925年6月11日の『台湾民報』3巻17号に「魚的悲哀」を、9月6日、13日、20日、27日、10月4日の『台湾民報』69-73号まで5回に亘って連載されたのが

「狹的籠」であった。そして、エロシェンコ「狹的籠」に描く自ら自我の解放を抑圧する精神世界は『狂人日記』と一脈通じるものがあつた。魯迅と周作人が日本に留学していた1902年から1911年の時期とは、広い意味での「大正デモクラシーの時代」(1905-1932)<sup>8)</sup>の萌芽の時期であつた。

また、台湾からの〈内地〉留学生劉炳鷗(1905-1940)は、1920年9月に台南長栄中学を退学し、青山学院中学部3年編入、1923年3月に中学部卒業し、1923年4月に青山学院高等学部文科英文学専攻に進学、1926年3月に高等学部卒業するまで、5年半の東京体験(1920.9-1926.3)を有している<sup>9)</sup>。彼は関東大震災も体験して、移り行く日本の変化を「現代の日本文壇は個人主義文芸から集団主義文芸へと向かう転換期にある」(1928年7月12日付、劉炳鷗『『色情文化』訳者題記)と、敏感に受けとめていた。

鈴木貞美はこの時代の変化を次のように分析する。

「大正生命主義」は、国際的普遍主義(Interational-Universalism)の観念を有し、どの国の理念も、抽象化して一体にしてしまう御都合主義的(opportunistic)な普遍主義の傾向を有していた。しかし、1923年9月1日の関東大震災を前後する時期に、第一次大戦の民族文化相対主義の風潮の中で、東洋と西洋の差異への関心が見られ、「生命主義」が「大宇宙の生命」といった普遍主義から、「民族の生命」という民族主義的(nationalistic)な観念にまとまっていく傾向が出てくる。そしてこれが、昭和の思想・文化史では国家民族主義(State-Nationalism)や大アジア主義の展開の中で、モダニズム芸術としてエロ・グロ的に風俗化していく傾向があつた<sup>10)</sup>、と。

そこで次に、上記の抑圧された「民族の生命」の問題を提起する(2)と(10)の翻訳意義を、「生命主義」の観点を分析の手法として、張我軍が「民族問題」や「民族意識」を如何に理解しているかを、張我軍が第1次北京時期(1924.3-1924.10)に目睹・見聞可能な『小説月報』の「被圧迫民族」「弱小民族」「虐げられた民族」の特集から俯瞰したい。

## II 『小説月報』が扱う「民族問題」の特徴

1910年1月と1915年1月に上海・商務印書館が創刊した『小説月報』

と『婦女雑誌』は、当初、前者が「才子多病、佳人薄命」式の「鴛鴦胡蝶派」と称された旧白話小説を多く載せる雑誌で、後者は創刊当初には「良妻賢母」や「三従四徳」を称揚する雑誌に過ぎなかった。ところが、上海商務印書館は1921年1月から、茅盾(1896-1981)を『小説月報』(12巻1号から)の主編(編集長)に充て、章錫琛(1889-1969)を『婦女雑誌』(8巻1号から)の主編に任命すると、両誌ともに社会に対する挑戦的な特集を企画し編集する雑誌への革新が行われた。

ところで、李漢俊(1890-1927)は、1920年5月、陳独秀(1879-1942)が上海で設立した共産主義支部組織に参加し、中国共産党の発起人の一人になり、また、1921年4月25日前後には芥川龍之介の自宅への訪問をうけ対談を果たした人物で、1904年から1918年までの14年の長きに亘り明治・大正の時期の日本で青春を過ごしていた。李漢俊は、『上海游記』で芥川も語っている通り、「信条よりすれば社会主義者、上海に於ける『若き支那』を代表すべき一人なり」であり、大正期の知識青年たち同様、「支那」を代表する青年知識人も、「自己表現」「自我の解放」を標榜し同時に、広く教養を身につけ人格を高めることを目標とした「大正教養主義」の潮流に身を置いていた<sup>11)</sup>。

その李漢俊は、「厂晶」「海鏡」という筆名を用い、1921年7月と1922年7月『小説月報』12巻7号と13巻7号に「ユダヤ文学」と「ポーランド文学」の紹介を千葉亀雄著作から翻訳している。

- ・千葉亀雄著・厂晶訳「猶太文学与賓斯基」『小説月報』12巻7号、1921.7  
→原典：千葉亀雄「猶太文学とピンスキー」『早稲田文学』184号、1921.3
- ・千葉亀雄著・海鏡訳「波蘭文学的特性」『小説月報』13巻7号、1922.7  
→原典：千葉亀雄「波蘭文学の特殊性」『早稲田文学』186号、1921.5

改革、刷新した『婦女雑誌』の特集の課題が「婦人・婦女問題」(「恋愛・結婚問題」)を中心に立てられた。一方、1919年1月パリ講和会議における第一次世界大戦終結後の国際秩序の潮流としての「民族自決」の影響と、この会議での中国処遇への不満から抗日・反帝国主義運動(五・四運動)となって展開した国家主義(nationalism)の高揚の影響とが相伴って、「民族自決」の未だ果たせない中国が「被圧迫民族」或いは「弱小民族」の現状とその文学に自国の姿を映し出すために、革新後『小説月報』の特集と



して組まれることになっても不思議ではなからう。

事実、1921年10月号の『小説月報』（12巻10号）は、「虐げられた民族の文学号（被損害民族的文学号）」と題した特集が生まれ、以下の7篇の概説の翻訳を、周作人訳で1篇、魯迅訳で2篇、茅盾訳で2篇、沈澤民と胡天月の訳でそれぞれ1篇が紹介された。

- ・周作人訳、ポーランド・カラヴェンスキイ (Jan de Holecwinski) 著「近代ポーランド文学概観」
- ・唐俟（魯迅）訳、チェコ・カラセック (Josef Karásek) 著「近代チェコ文学概観」
- ・沈澤民訳、セルビア・ミジャトヴィチ (Chedo Mijatovich) 著「近代セルビア文学概観」
- ・沈雁冰（茅盾）訳、ラズデン (Hermione Ramsden) 著「フィンランドの文学」
- ・沈雁冰（茅盾）著「新ユダヤ文学概観」
- ・唐俟（魯迅）訳、ドイツ・カールペリス (G. Karpeles) 著「小ロシア文学略説」（ウクライナ）
- ・胡天月訳述「新興小国文学述略—リトアニア、ラトビア、エストニア、ジョージア、アルメニア五国」

以上の「虐げられた民族の文学」の概説や具体的な作品の紹介に先立ち、記者「序文」の「虐げられた民族の文学を何故研究しなければならないのか」の中で次のように説明する。

およそ虐げられた民族の正義を求め公平を求める叫びは本当の正義本当の公平である。压榨機に搾られ残った人間性にはじめて正真正銘の尊い人間性であり、強者の色彩を帯びない人間性である。彼らの中の虐げられて下に向かう精神（靈魂）が私たちを感動させる。なぜなら私たち自身もまた同じように不合理な伝統思想と制度の犠牲者であることに心を痛めているからである。彼らの中の虐げられても相変わらず上に向かう精神（靈魂）はさらに私たちを感動させる。なぜならこのことより私たちは人間性の砂礫には純金があることをさらに確信し、前途の暗黒の背後は光明であることをさらに確信したからである。<sup>12)</sup>

この文章は余りに抽象的表面的な美辞麗句に纏われていて、「何故研究しなければならないのか」は見えてこない。ところが、この文章の上段で「序文」と同じ頁を割いて説明する「虐げられた民族の文学背景と縮図」では、「本号が紹介する幾つかの虐げられた民族は大方が顔すら見たこともないので、私はここに「文学背景」の「縮図」を書いておこう」と説明し、「虐げられる民族」の「民族文学の特質」が次の3項目の特徴との関わりから「縮図」として捉えられるとした。

一、どんな民族に属するか—(民族性遺伝の特性)

二、虐げられたことにより生じた特性

三、所在地の特別な環境—(自然的或いは社会的な影響)

そして、実際には、(人種と国境)、(自然的な環境と社会的な環境)そして最後に(虐げられたことにより生じた特性)に区分して、「ポーランド」「チェコ・スロバキア共和国」「フィンランド」「ウクライナ」「南スラブ」「ブルガリア」の国々を分類対象に選定している。

フィンランドを除けば、すべてが強国と強国とに挟まれた東欧の地域である。

ここで注目すべきは、1919年のベルサイユ体制での国際秩序と「民族自決」の潮流において、1921年の『小説月報』刷新時期には、中国の国際的立場の弱小性と民族としての脆弱性を念頭に、中国の現状を打開すべく、その弱さの理由や原因を同様な状況に置かれていると感じた東欧の国家と民族に、そして同じ文明の老国のギリシャに中国を重ね合わせていることにである。

### III 張我軍が翻訳した2作の大正生命主義の系譜

#### —「民族」の「生命力」

#### 1 〈宗教的革命家甘地(即台灣之所謂顏智)〉『台湾民報』第3巻第18号(1925.6.21)―第73号(1925.10.4)

張我軍が大正・昭和初期の日本からの翻訳素材を取捨選択し、中国語で翻訳或いは紹介して『台湾民報』に掲載した作品に「民族問題」に関わる系譜がある。作品は2作品で、一つは宮島新三郎・相田隆太郎共著「宗教的革命家ガンデイ」『改造思想十二講』(東京・新潮社、1922.12、第11講、399-441頁)を「宗教的革命家甘地(即台灣之所謂顏智)」(「甘地」は「ガ

ンディー」のことだが、台湾語での表記「顔智」は日本語の音読「ガンチ」に近い」と訳題して、『台湾民報』第3巻第18号（1925.6.21）から第73号（1925.10.4）まで全13回に亘り連載されている。

宮島・相田の『改造思想十二講』は「序文」にいわく、「既に公になつてゐる」を「極めて通俗的にその伝記思想等を略述したもの」なので、12篇の概説が二人のどちらの著作なのかは不明である。張我軍はこの計44頁に及ぶガンディー（Gandhi, 1869-1948）の伝記—「その生涯」「サチアグラハ運動」「ガンデイの思想—サチアグラハ」「ガンデイの宗教観・経済観」「ガンデイの位置と諸家の批評」—のうち「ガンデイの思想—サチアグラハ」全5頁半、「ガンデイの位置と諸家の批評」全8頁のうち最初2頁を除き、全ての原文を逐語訳・直訳体で正確に翻訳している。ただ、上記の小タイトルの中国語の訳題は「其一生」と「甘地的宗教観・経済観」の二つに省略されている。

もう一つが、山川均「弱<sup>マツ</sup>少<sup>マツ</sup>民族の悲哀：『一視同仁』『内地延長主義』『醇化融合政策』の下に於ける台湾」（初載『改造』1926年5月号／単行本『殖民政策下の台湾：弱<sup>マツ</sup>少<sup>マツ</sup>民族の悲哀』（神戸・プレプス出版社、1926.12）で、張我軍は「弱<sup>マツ</sup>少<sup>マツ</sup>民族の悲哀—在「一視同仁」,「内地延長主義」,「同化融合政策」下の台湾」というタイトルを直訳した訳題で、『台湾民報』第105巻（1926.5.16）から第115号（1926.7.25）まで全10回に亘り連載した。訳文も逐語訳・直訳体で正確な翻訳である。

単行本出版『殖民政策下の台湾：弱<sup>マツ</sup>少<sup>マツ</sup>民族の悲哀』は全83頁、15章に及ぶ作品だが、張我軍が翻訳した部分は、前半の1頁から11頁までの3章分だけである。

ここでまず、宮島・相田『宗教的革命家ガンデイ』の作品の要点を紹介しておく。

### 宮島・相田『宗教的革命家ガンデイ』

本書においては、ガンディーの「非暴力的抵抗運動」や「不服従運動」が「無抵抗的抵抗運動」と誤解されて紹介されているものの、全般的には、以下のようにガンディーの経歴が要領よく紹介されている。

ガンディーは、ロンドン大学卒業後に法廷弁護士（パリスタ・アット・ロウ）となり、1893年インド人移民の法的権利の擁護のため英領南アフリカに渡ると、「南アフリカの英領殖民地は所謂殖民地気風の濃厚なところで、

印度人などは殆んど動物扱いを受けてゐた」と感じ、「世界に於けるアジア民族、就中印度民族がいかに惨憺たるものであるかといふことを、彼は身にしみて感じないではゐられなかつた」。そこで、ガンディーは「虐げられつつある印度人の地位の向上と、民族的発展を計るべく全力を捧げることを心に誓つてゐた」。当初、1914年春に欧州大戦が起こると、英帝国のためにインド野戦病院義勇兵を組織したり、1918年デーリイ戦争会議では英帝国の支持を表明し、インド自治の日を早めようとしたが、英帝国が勝利しても逆に、1919年4月には、革命運動の防止と犯人逮捕の迅速化と裁判の簡素化を実現する「ローラット法」発布に反対する非武装の市民に無差別に発砲した「パンジャブ大虐殺事件」が発生している。これ以来、ガンディーは独立運動のインド国民会議に加わり、印度語（ヒンディー語）の「真実と愛から生まれる力」を意味するサティーグラハ（Satyagraha）という精神を掲げた非暴力抵抗運動により、更にカリフェート（回教主マホメットの継続者）問題を契機に、回教（イスラム教）と印度教（ヒन्दウー教）を提携させたことにより、インド全体を巻きこむ「不服従運動」に展開できたことが紹介されている。

次に、①「大正生命主義」と②「民族問題」とに関わるガンディーとその紹介者の認識を示す文章を挙げてみる。

- ① ガンディは西洋流の物質文明を極端に嫌つてゐる。…彼によれば工業主義の発展は決して我々の幸福の増加を意味しない。工業主義、物質文明の進歩は国民を啓蒙するかほりに奴隷化する。…ガンディは印度の経済政策の根本として、農業と手紡ぎとスワラジを主張してゐる。…ガンディは、サチアグラハ（Satyagraha）の協会員には国産（品愛用）の誓いを立てさせ、国産綿布の使用と、チャルクハ（紡績機）を以て、或は手織機を以て国産増産に力をつくすことを実行させてゐるが、これ即ち彼の経済政策である。…チャルクハ（紡績機）と手織機と農業との経済政策は、一面から見れば甚だ消極的で時代おくれである。然し仔細に見ればそれはクロボトキンやウキリアム・モリス、或はカアベンターの思想と著しい共通点がある。…近代資本主義に立脚する経済は、消費が本位ではなく生産が本位である。従つてそこに生産の過剰や生産上の競争が生じ、富める者は益々富み貧しい者は益々貧しくなる。この点で非資本主義たるチャルクハ主義は何人をも主人とせず、何人をも僕としない。自給自足主義である。<sup>13)</sup>（下線部は全

て筆者、以下同様。)

- ② [ガンデイの特色と位置] アジア民族の選手として白人支配の世界に宣戦しつつあること。現代は白色人種就中英米人種支配の世界である。この滔々たる白色人種の支配力を向うに廻して、勇敢に戦ひつつあるは我日本と、印度のガンデイ等のサチアグラハの闘士である。欧州大戦によつてドイツが一敗地に塗れてより、世界は全く英米の手中に陥つた。然しアジア民族は常に白色人種に圧迫されて抬頭の機を得ない。世界は遂に白色人種対黄色人種の大決戦を招かずにはゐられないであらう。若し黄色人種にして白色人種の膝下に屈するを潔しとしないならば、彼等は白人と、のるかそるかの大決戦をやるより外はないのだ。そしてこの黄白両民族争闘の幕は既に切り落されてゐる。ガンデイは実に現在に於けるこの兩人種争闘の第一戦線に立つて戦ひつつある偉大な人物であること固より云ふ迄もない。…アジア民族対白色人種の闘争の第一戦に、アジア民族を代表して闘争しつつある点で、白色支配の大勢に向つて勇しく鉄槌を振つてゐる点で、ガンデイの政治家として社会改造家としての位置は極めてユニークであり且重大である。<sup>14)</sup>

## 2 〈<sup>マ</sup>弱少民族的悲哀—在「一視同仁」、「内地延長主義」、「同化融合政策」下的台湾』『台湾民報』第105卷(1926.5.16)－第115号(1926.7.25)

吉野作造ら民本主義知識人の展開するデモクラシー運動から影響を受けた内地(日本)留学の台湾人学生が1921年から始めた「台湾議會設置請願運動」だったが、1922年から台湾にも施行された治安警察法により1923年2月2日に運動を支えるため結成した組織「台湾議會期成同盟会」は台湾独立運動の一環と断定されて解散させられ、12月22日には請願に参加した29人が治安警察法違反で逮捕され、うち13人が有罪(2人が有期懲役「禁錮」4ヶ月、5人が有期懲役3ヶ月、6人に罰金100円)の判決を受けた<sup>15)</sup>。

そもそも、原敬内閣により初の文官総督(1919.10-1923.9)になった田健治郎(1855-1930)は、国際的にはウィルソンの「民族自決主義」と国内的には「大正デモクラシー」の世相を背景に、「一視同仁」「内台一体」の方針のもと、「内地延長主義」を主張し、内台の差別をなくす「同化融合政策」を行っていたが、1921年11月4日の原敬暗殺事件により事態は一変した。1921年3月に施行した法律第3号「法三号」の「内地延長主義」

規定のもと、台湾でも「内地延長主義」は治安警察法の施行により、結社、集会などの自由を取り締まる弾圧の方向へと転換している。さらに、1923年9月1日に発生した関東大震災後の混乱を受けて公布された緊急勅令「治安維持ノ為ニスル罰則ニ関スル件」を前身とする治安維持法の制定(1925.4)を迎えることになる。

山川均(1880-1958)が『改造』1926年5月号に発表した「<sup>マ</sup>弱少<sup>マ</sup>民族の悲哀：『一視同仁』『内地延長主義』『醇化融合政策』の下に於ける台湾」は、単行出版の時に『殖民政策下の台湾』の副題として「<sup>マ</sup>弱少<sup>マ</sup>民族の悲哀」を残したが、1926年には「一視同仁」「内地延長主義」「醇化融合政策」のすべてが、真の意味での「〈弱小〉民族の悲哀」となったことを意味するのだろう。

### 山川均『<sup>マ</sup>弱少<sup>マ</sup>民族の悲哀』

山川均『<sup>マ</sup>弱少<sup>マ</sup>民族の悲哀』の3章の構成を内容から判断してタイトルをつけると、(一)台湾植民地領有の税収の増加、(二)台湾統治意義の変化と農民の困窮化、(三)台湾農民の階級的分化の進行状況となろう。また、(一)から始まる1頁目の冒頭には、(前書)なぜ台湾を紹介するのかが置かれているので、この原文の詳細を活かしながら内容を紹介する。

(前書) 台湾には、日本国民の全体の名によつて政治的にも経済的にも支配せられてゐる三百五十万の<sup>マ</sup>民族がある。…本年(大正十五年)の衆議院には、台湾特別議會開設の請願が提出され、この請願は憲法に違反せぬものとして受理せられたといふことである。…この事實は、多くの人々の注意を、不当に忘れられてゐた台湾民族の上に引き戻したに違いない。(下線部は筆者、以下同様。)

(一) 明治二十八年に台湾が領有せられ、三十年からは特別会計が立てられた。当時の計画では、明治四十二年までは、年々、台湾統治の経費を、国庫から補助しなければならぬ予定であつた。…然るに台湾の『開発』は予想以上に進捗し、明治三十七年限り、総督府の財政は独立して、もはや本国の補助を必要とせぬこととなつた。この九ケ年間に本国の財政から台湾に補助した金額は、30,488,689圓であつて、これが領有以来、日本が台湾につき込んだ元金であつた。この資本に対して、…明治三十年から大正十年までの対内貿易(本島と母国間)の移出入金額を総計して見ると、2,003,312,000圓であつて、

ここから生ずる純益を最低一割五分と見積つても、300,481,848圓であつて、日本が領有以來、台湾に注ぎ込んだ元金の十倍近くとなる。

(二) 大正八年、最初の文官総督として赴任した田総督の施政方針を読むと、初めて産業政策に重きがおかれてゐる。大正八年前後は、台湾の経済状態にいちぢるしい変化の現はれた時期であつて、台湾における各種企業の会社数は、大正七年の二百三十五社から九年には四百三十四社に激増し、その資本総額は二億圓から一躍して、五億七千万圓となつた時期であつた。…この時をもつて、武官政治から文官政治に推移した。

- ・台湾全島の人口三百九十万人中、…農民は明治四十三年には総人口の63%、大正二年には62%となり、大正五年には一時64%に増加したが、八年には再び62%に低下し、十年には60%に減じ、大正十一年十二年には、更に減じて58%に降つてゐる。…総人口との割合から見れば、…農民の人口は、…いちぢるしい勢いで減じて居り、しかもこれは一時的の現象ではなくて、確乎たる傾向なのである。
- ・耕地面積は、…明治三十五年…を100とすれば、四十年には150に、…大正九年には171、十年、十一年、十二年の三ヶ年は172を保ち、耕地の増加はもはや停止の状態にある。…農業人口は絶対的には増加はしたが、総人口の増加に対しても、耕地の増加に対しても、相対的には減少した。…農民はその生活を維持するために、漸次、より多くの土地を耕すことが必要となつてゐる。
- ・農産物の価格総額は、大正三年の八千余万圓から、大正十一年には一億八千六百万圓に激増し、…物価は約二倍となつてゐるが…千三百万圓以上の増加となる。然るに農民の生活状態、ことに多数の小農の生活状態は、この間にいちぢるしく窮迫を来し…この増加した生産力の結果は、多数の農民には帰さないで、彼等以外の何者かによつて搾取せられてゐるのである。
- ・大正九年—十年における台湾の耕地七十二万一千余甲について、…耕地の約七分の一を二十六万戸（総戸数の64%）が持つて居り、他方にはほぼ之と均しい面積を、百九十六戸は占有する。…台湾における土地集中の程度は、内地よりはやや低いにせよ、大体において大差のない状態にある。

(三) 日本の産業政策の下に、台湾に於ける土地の集中が行われ、自作農と小作農とは減少し、自作兼小作農が増加してゐるのである。約四万五千戸の小地主は、恐らくはその大部分が、五分未滿の土地では一家を支えることができないので、他の地主から土地を借入れて自作兼小作農となり、耕地五分以

上の農民戸数の一部分をなしてゐると思われる。<sup>16)</sup>

以上、張我軍が翻訳した宮島・相田『宗教的革命家ガンデイ』と山川均『弱少民族の悲哀』である。

この2作品は、宮島・相田『宗教的革命家ガンデイ』が関東大震災発生以前の1922年12月に発表された作品で、山川均『殖民政策下の台湾』が震災後の1926年5月に初載で、12月に単行出版で発表された作品で、顕著な時代の潮流と社会情勢の変化が「民族」をキーワードに映し出されている。

### 競争しない「集団」の「生命力」(ガンディー自身)

『宗教的革命家ガンデイ』では、ガンディーの運動が「虐げられつつある印度人」、「印度人などは殆んど動物扱いを受けて」おり、「アジア民族」とりわけ「印度民族がいかに惨憺たるものであるか」という自国と「民族」への認識に始まるが、彼が「民族的発展」のために採用したのが、「真実と愛から生まれる力」を意味するサティーグラハ (Satyagraha) を掲げた非暴力抵抗運動と「非資本主義たるチャルクハ主義は何人をも主人とせず、何人をも僕としない」「チャルクハ (紡績機) と手織機と農業との経済政策」<sup>17)</sup>を貫くために実行を働きかけた国産品愛用であるスワデーシ (Swadesi) 運動であった。この一連の一貫した思想と運動は、競争を基本原理とし、個人の利益や権利を強調する余りに物質の下に「人」を「奴隷化」した「西洋流の物質文明」の価値観に対する挑戦であり、ガンディーは「生存競争」を超える普遍的概念としての「生命」を、「真実と愛から生まれる力」を意味するサティーグラハ (Satyagraha) という言葉を武器に、さらに資本主義的競争に頼らない家内制手工業であるチャルカー「手紡ぎ車」主義により「何人をも主人とせず、何人をも僕としない」社会を実現しようとした。正に一つの「近代の超克」の姿であり、「大正生命主義」の精神でもある。

### 越境・アイデンティファイされる「集団」の「生命力」(植民地統治者側)

『宗教的革命家ガンデイ』には、本来は全くの別の立場と思想でありながら、ガンディーを借りながら我等日本人も同じであると、彼の理念と行動を恣意的に「越境」し「同一化」する議論が挟まれる。それは、ガンディー



を「アジア民族の旗手として白人支配の世界に宣戦しつつある」人物と位置づけ、「英米人種支配の世界」「白色人種の支配」に対して、「勇敢に戦ひつつあるは我日本と、印度のガンデイ等のサチアグラハの闘士」であるとする。「アジア民族は常に白色人種に圧迫されて抬頭の機を得ない。世界は遂に白色人種対黄色人種の大決戦を招かずにはゐられないであろう」。「彼等（アジア民族ないしインド民族）は白人と、のるかそるかの一大決戦をやるより外はないのだ」。そして、「アジア民族対白色人種の闘争の第一戦に、アジア民族を代表して闘争しつつある点で、白色支配の大勢に向つて勇しく鉄槌を振つてゐる点」において、ガンディーと将来の日本の姿を「同一化」させる。正しく、「生命主義」が「民族の生命」という民族主義的な観念にまとまっていく傾向を反映させている。

#### 「弱小民族」としての「台湾民族」の「生命力」（植民地内部）

張我軍が山川均の『殖民政策下の台湾』の副題を主題に『弱少民族の悲哀』として訳出した要点は、耕作地「五分未滿の土地は、一戸の生活を支へるに足りない面積であるから、耕作者の三分の一に近い約十三万戸の農民は、副業により、または農業労働者その他の半労働者として辛うじて生活してゐる、最下層の貧農階級であることは云ふまでもない」。一方、「七甲以上の耕作者戸数とその総面積との間の著るしい相違があるのは、これ等の大所有地の約半分は、分割して小作に出してあるからに外ならぬ」という現状であろう。ちなみに、1甲は9699.27m<sup>2</sup>で、1分は1甲の10分の1である。

このことから、台湾も植民地経営が着々と進み、1922年には人口390万の中の58%すなわち230万人は農民で、その64%を占める小農の生活は物価上昇に追いつかず著しく窮迫し、1年で4万戸の自作農兼小作農が増加し、一方、「増加した生産力の結果は、多数の農民には帰さないで、彼等以外の何者かによつて搾取せられてゐる」現状と、富農は土地を貸し出し益々裕福になり、貧富の差拡大する現状とは、密接に関わり合っている。すなわち、植民地経営者である日本の権力統治者には、支配される側の内部に競争に勝ち残った有力な協力者を擁し、統治者と協力者は弱者を犠牲にしながらお互いが益々富める現状が読み取れる。

#### IV 『台湾民報』にみる階級闘争と民族運動の「生命力」

張我軍は『弱少民族の悲哀』<sup>マア</sup>を翻訳し、そこに描く台湾の姿を、1921年の『小説月報』(12巻10号)の特集号「虐げられた民族の文学号(被損害民族的文学号)」とその流れを汲む李漢俊訳・千葉亀雄著の「猶太文学とピンスキー」『小説月報』(12巻7号、1921.7)と「波蘭文学の特殊性」『小説月報』(13巻7号、1922.7)で描く「ユダヤ」「ポーランド」などの「弱小民族」の姿に投影させ、「弱小民族」として扱われる「国家」「民族」の成り立ちと運命に対して関心と興味を寄せている。

その証拠に張我軍は、1930年に千葉亀雄「現代希臘文学概観」「現代バルカン半島文学大綱」「現代猶太文学概観」『世界文学講座』第12「現代世界文学篇上巻」(新潮社、1930.5)を購入するとすぐに翻訳し、千葉亀雄・張我軍訳「現代希臘文学大綱」「現代巴爾幹半島文学大綱」「現代猶太文学大綱」『現代世界文学大綱』(上海・神州国光社、1930.12)となって出版された事実があり、彼は終始、台湾民族を含む世界の「弱小民族」「虐げられた民族」に関心を寄せていたことが窺える。

また、陳偉智は1927年6月26日の『台湾民報』163号に、王白淵(1902-1965)は「吾們青年的覚悟」<sup>ガンジー</sup>において、東京でガンジーの伝記と受難の原理を読んでから、「聖勇甘地が出現して後、インドの国民独立運動が白熱の頂点に達し、非共同(non-cooperatin)を提唱し、経済の断絶(Swadeshi)を実行した」ことを、東方民族覚醒の例証としていることを指摘し、さらに、王白淵が岩手県女子師範学校就任時代に刊行した『荊の道』(盛岡市・久保庄書店、1931.6)に所収する「ガンジーと印度の独立運動」においては、「民族運動はその本質に於てプロレタリア運動の派生物であり一里塚であり…(中略)…現代の民族の対立は資本主義社会の発生と共に始まり資本主義社会の没落と共に消滅する」や「インドが単なる民族運動を超えて世界プロレタリア運動の一部として重大な歴史的役割を果たしつつある」というような言説は、「フランツ・ファノン(Frantz Fanon)が第三世界の民族主義について考察するさい強調した、弱小民族の解放運動はグローバルな社会革命と同時に行わなければならない、つまり民族の解放と同時に、社会革命も行わなければならない、というのと同様である」として、王白淵の思想的変更を指摘している。最後に、1920年代の植民地台湾は、「顔<sup>ガン</sup>智」<sup>ジー</sup>というこの表記の上に、二種類の同時に併存する国際的な想像を見出

していた。帝国間の植民に関する交換と被植民者の弱小民族という国際的想像である。ひとりの台湾人が論じた弱小民族論の国際主義が、このような系譜のなかにも出現する。あるレベルにおいては、台湾人もこの系譜のなかで中国や近隣地域の変革を見ていたのであり、そこに台湾反植民地運動のアジアと世界に関する想像が形成されたのである、と結論づけている(下線部は筆者)<sup>18)</sup>。

上記下線部を施した王白淵の思想的変更の要因である東京での左翼作家たちとの接触については、柳書琴『荊棘之道』<sup>19)</sup>に詳しいのでそちらに譲るとして、ここでは、社会改革運動としての「階級闘争」と「民族運動」の問題が当時の『台湾民報』でも議論の対象であったことを示して論を締めくくりたい。

『台湾民報』紙上では、155号(1927.5.1)に①社説「農民・労働者を基礎とする民族運動(以農工階級為基礎的民族運動)」、157号(1927.5.15)に②評論「階級闘争と民族運動(階級争闘與民族運動)」、163号(1927.6.26)に③評論「台湾における階級闘争は民族運動から抜け出すことはできない(在臺灣の階級争闘是脱不出民族運動)」、163号と164号(1927.7.1)の連載で④論壇、布施辰治氏談「階級闘争と民族運動(階級運動與民族運動)上・下」、181号(1927.11.6)に⑤雪谷「文協の新宣言 階級闘争は語らず、民族運動を提唱する(文協の新宣言 不談階級争闘提倡民族運動)」のように、内題からは「階級闘争」と「民族運動」が盛んに議論されていた様子が窺われる。

紙幅の関係上、①から⑤の論調をそれぞれ詳しくは扱えないが、①では、現在の中国は農民・労働者階級を基礎とする民族運動を採用している。台湾では最近階級闘争を採用することを主張する人がいるが、これは大きな誤りである。共産主義の信徒が現時点での台湾で階級闘争を主張しようとするのは、自らを欺き人をも騙すもので、台湾の現状をあまりにも無視している、と。②では、台湾人がもし階級闘争を取り入れようと思うなら、台湾人自身が必ず分裂してしまう。有産階級と無産階級に分裂すれば、お互いが殺し合い、骨肉の争いとなり、勢力が分散する。弱小民族内の階級闘争は民族の自滅である、と。③では、同じ工場内の労働者が、内地人と台湾人である場合、内地人は台湾に着くなり優越階級となり、民族的な優越感を懐いてしまうので、台湾の階級闘争は民族運動の範囲を抜け出すことができない、と。④では、布施辰治(1880-1953)の台湾旅行時の講演

記録であり、階級闘争による社会改革を信念とし、地域の境界を越えて、全世界の様々な民族の無産階級が団結することが可能なので、階級闘争と民族運動とを抗争させ、分裂させるべきではない、と。⑤では、台湾文化協会の新幹部は、階級闘争を主張したのではなく、民族運動を排斥したのであり、第三インターナショナルの戦術を真似て、民族運動者に誹謗中傷を加え、台湾のすべての全民衆の解放運動の共同戦線をこなごなにしてみました。そこで、階級闘争から民族運動へと方向転換することが台湾人には幸福である、という議論がなされている。

フランツ・ファノンと布施辰治の議論は今日のグローバルな環境においては議論可能な発想かもしれないが、当時としては現実性のない机上の理論に近いかもしれない。ただ、同一民族内におこる階級闘争の問題が、③のように、他の民族間に起こる労働問題（経営者と労働者、上司と部下）として扱われると、階級闘争は民族運動の問題に転化されてしまう事実は興味深い。階級闘争も民族運動も、個人の利害追求の自由と集団の生存競争の「生命力」が引き起こした現象である。特に、『台湾民報』を見渡す限りでは、婦人・婦女問題や、階級闘争の問題や民族運動などの「集団」や「民族」などの競争する「生命力」を鼓吹する題目は多く見かけるものの、自立する「個」の創造的な「生命力」を称揚する「大正生命主義」の流れを汲む作品は、例えば、武者小路実篤戯曲『愛慾』の連載が2回だけで打ち切られたように、その意義が認められていない。

要するに、日本植民地支配の圧迫を生活の一部として考慮する必要の無い北京という特殊な環境に身を置いた張我軍であつたればこそ、「大正デモクラシーの時代」の良質の精神であつた「大正生命主義」を感受できていたが、台湾にはこの精神はまったく根付いていなかったと言えるのではないだろうか。

## おわりに

張我軍が「台湾の文学は、中国文学の一支流である」と主張した理由は、日本植民地下にありながらも、彼自身が、台湾は中国の一部であり、台湾人は中国人だ、と認識していたからである。この認識は、第1次北京体験時期（1924年）に始まり、『台湾民報』編集担当時期（1925-26年）を経て、第2次北京体験時期（1926-46年）到北京師範大学卒業後、北京（北平）

で大学の非常勤や自宅で教室を開いて日本語教育に携わり、中国人として日本語を生活の糧としながらも、「親日」であれ「反日」であれ「日本を正視し、日本を研究し、日本を認識する」<sup>20)</sup>という大前提が重要だと考えて、日本近代文学（白樺派・プロレタリア文学作品）を翻訳していた時期（1929-37年）までの、およそ13年間は継続していたと考えられる。

最近の張我軍研究では、1937年以降に日中戦争が全面的に展開する中、日本占領軍の文化広報活動として行われた、映画『東洋平和の道』（1938）の製作に協力したことが明らかにされている。また、所謂傀儡といわれた中華民国臨時政府下にある北京大学で教授を務め、周作人とは同僚であったこと、更に、1942年と43年の東京で開催された第2回、第3回「大東亜文学大会」に中華民国代表として参加したこと、日本近代文学では、「自然主義」に傾倒、特に島崎藤村に傾倒し、合計3冊30篇の翻訳を行っているなどが論証されている<sup>21)</sup>。

張我軍が、台湾人は中国人で、台湾は中国の一部であると考えながらも、中国での流行を経て『台湾民報』で紹介したのが、「大正生命主義」の典型として、心身活動を阻害するものから解放する「個人」の自立的で創造的な「生命力」を重視した厨川白村と武者小路実篤の作品を翻訳したこと、一方、「競争する個を超え、普遍的概念としての『生命』を重視する」のが「大正生命主義」の精神ではあったが、「生命主義」が「民族」の「集団」の「生命力」を基本概念とすれば、強力なナショナリズムともなり得た。この格好な例の典型として読めるのが宮島・相田『宗教的革命家ガンデイ』と山川均『弱少民族の悲哀』であり、この2篇を張我軍がなぜ翻訳・紹介したかの意義を明らかにしようとした。

結果、本稿では、張我軍が『台湾民報』の編集を担当していた時期（1925.1-1926.6）が、日本が関東大震災後の国際主義から国家主義、個人主義から集団主義へと転換期にあったことを周知の事実として次の考察の結論を得た。

宮島・相田『宗教的革命家ガンデイ』は、関東大震災前の1922年の刊行で、「民族」の「集団」の「生命力」を基本概念としながらも、ガンディーという自立的で独創的な「生命力」が推し進めた「非暴力抵抗運動」という新たな文化が創造された例であったと判明した。

一方、山川均『弱少民族の悲哀』は、関東大震災後の1926年の刊行で、日本が推し進めた「一視同仁」、「内地延長主義」、「同化融合政策」という

国家・国粹主義的な「集団」の「生命力」の発露を鼓吹した作品であったと捉えることができた。

最後に、『台湾民報』で展開されたのは、階級闘争の問題や民族運動などの「集団」や「民族」などの競争する「生命力」を鼓吹した「生命主義」の系譜であり、台湾においては、大陸・中国で魯迅や周作人及び張我軍が受け容れられたような、自立する「個人」の創造的な「生命力」を称揚する「大正生命主義」は受容されていなかったことを論じた。

## 注

- 1) 河原功『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』研文出版、研文選書72、1997.11、123-246頁

中島利郎、河原功、下村作次郎編『台湾近現代文学史』「第一章 台湾新文学の黎明—「揺籃期」の文学」研文出版、2014.5、16-54頁

- 2) 許俊雅編選『張我軍』国立台湾文学館出版、台湾現当代作家研究資料彙編16、2012.3

- 3) 山口守「北京時期的張我軍：被文化与政治夾擊的主体性」『台湾文学研究集刊』台湾大学文学研究集刊編集委員会、2017.2／山口守「張我軍と映画『東洋平和の道』及び大東亜文学者大会について」『研究所年報』10号、女子大学草稿・テキスト研究所、2017.3

山口は、張我軍の北京時代を4期に分けそれぞれの時期の特徴を次のように分析する。第1期(1926-29)は、殖民地台湾出身者として祖国への期待と葛藤を懐き、中国大学及び北京師範大学の国文科で学習していた時期である。第2期(1929-37)は、北京師範大学卒業後に台湾には帰らず、大学の非常勤や自宅で教室を開いて日本語教育に携わる一方、中国人として日本語を生活の手段としながらも、「親日」であれ「反日」であれ「日本を正視し、日本を研究し、日本を認識する」という大前提が重要だと認識し、白樺派とプロレタリア文学を中心に13冊13篇の近代日本文学の翻訳を行っている。第3期(1937-45)は、日中戦争が全面的に展開する中、日本占領軍の文化広報活動として行われた、映画『東洋平和の道』(1938)の製作に協力したり、所謂傀儡といわれた中華民国臨時政府下にある北京大学で教授を務め、更に、1942年と43年の東京で開催された第2回、第3回「大東亜文学大会」に中華民国代表として参加し、自然主義を中心に3冊30篇の近代日本文学の翻訳を行っている。4期(1945-46)は、台湾帰国までの準備の生活である。

- 4) 次の2冊を参考に翻訳作品を特定した。

楊紅英編〈張我軍譯文篇目〉《張我軍譯文集》上、社科卷、台北・海峡學術

- 出版社、2010.12、305頁／沈芳序〈附表三：《台灣民報》上張我軍作品統計〉  
《張我軍對胡適文學思想的傳播與接受：以《台灣民報》為分析場域（1923—1932）》國立成功大學台灣文學研究所博士論文、2014.7、137-147頁
- 5) 鈴木貞美『『大正生命主義』とは何か』『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995.3、3-4頁以後使用する「生命主義」「大正生命主義」の概念は、本著から引用したものである。
  - 6) 鈴木貞美『『大正生命主義』とは何か』『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995.3、2-15頁
  - 7) 『周作人日記』中、鄭州・大象出版社、1996.12、115頁
  - 8) 松尾尊兌『大正デモクラシー』岩波書店、同時代ライブラリー184、1994.5、2-39頁  
酒井哲哉『大正デモクラシー体制の崩壊—内政と外交』東京大学出版会、1992.1、8-21頁
  - 9) 康来新、許秦秦編選『劉呐鷗』国立台湾文学館出版、台湾現当代作家研究資料彙編53、2014  
彭小妍「浪蕩天涯—劉呐鷗1927年日記」『劉呐鷗全集』日記集（上）、台南県文化局、2001、7-25頁
  - 10) 鈴木貞美『『大正生命主義』とは何か』『大正生命主義と現代』河出書房新社、1995.3、11-13頁
  - 11) 工藤貴正「李漢俊と表現主義」（上一ロシア未来派との関係及び翻訳意義を巡って）（下一無産階級文芸の表現手法としての可能性）『愛知県立大学外国語学部紀要』（言語・文学編）第45号、2013.3、313-334頁、第46号、2014.3、327-349頁
  - 12) 「“被損害民族的文学号” 引言」『小説月報』12巻10号、1921.10、2-3頁
  - 13) 宮島新三郎・相田隆太郎共著「宗教的革命家ガンディ」『改造思想十二講』第11講、東京・新潮社、1922.12、431-435頁
  - 14) 注13) に同じ、441-442頁
  - 15) 王泰升「植民地下台湾の弾圧と抵抗—日本植民地統治と台湾人の政治抵抗文化」『札幌学院法学』21巻1号、鈴木敬夫訳、2004.9、238-239頁
  - 16) 山川均『殖民政策下の台湾：弱少民族の悲哀』神戸・プレプス出版社、1926.12、1-11頁
  - 17) 「チャルクハ（紡績機）と手織機」には、著者の誤解があり、チャルクハすなわちチャルカー（charkhā）がヒンディー語で「手紡ぎ車」で「手織機」である。
  - 18) 陳偉智「台湾における「顔智」—1920年代台湾反植民地運動における国際主義の契機—」『中国21』36号、東方書店、愛知大学現代中国学会、2012.3、209-226頁

- 19) 柳書琴「荊棘之道」『荊棘之道：台湾旅日青年的文学活動与文化抗争』聯經出版、2009.5、77-135頁
- 20) 張我軍「《日文与日語》的使命」『張我軍全集』台北・人間出版社、張光正編、台湾新文学史論叢刊4、414頁、初載北平《日文与日語》創刊号、1934.1.1
- 21) 注3) に同じ